



アマテラさん

その町はあまりにも大勢のゾンビが増えてしまった。ぼくは独り暮らしの女神アマテラさんのことが心配になって、会いに行ったんだ。

アマテラさんは両親から譲り受けた小さな町工場の屋根裏部屋で生活している。親が亡くなった後も作業員達は仕事をつづけていて、彼女はそこの家賃収入で細々と暮らしている。

屋根裏部屋へとつづく階段は裸電球が一個ぶら下がってるだけで暗く、しかも両側の壁は藁造りだ。階段は途中で行き止まりになっていて、頭上の真四角な天井板が彼女の部屋の入り口だ。粗末な天井板を押し上げると、すぐに小さなベッドが目に入った。簡素な机の上にはポータブルのテレビがおいてあった。

ぼくが中に入って数歩進むとすぐに畳の部屋があらわれた。小さなコタツに座布団が二枚敷かれてあった。少し大きくて厚みのある四つ足のテレビが大事なもののようにおいてあった。

「おや、邪善茶かい？」という声と共にふすまが近づいてきて、懐かしのアマテラさんが顔を覗かせた。

「いま食事の支度してたのサ。」そう言って台所の棚から小さな壺を降ろすと、まだ生臭い梅干しを一粒取り出した。

台所は役割を終えて消え去り、代わりに廁がスーッと現れた。相変わらず、妙な場所でアマテラさんは食事をする。

ぼくは無視して尋ねた。「最近町はゾンビだらけになってるけど、アマテラさん、どこか体の具合でも悪いのかい？」

アマテラさんは梅干しを口に含んだまま、きょとんとした顔でぼくを見つめた。それからテレビを呼び寄せて外の様子を確認めると、「ありゃりゃ!」と叫んで慌てて全ての部屋を開放したんだ。

ぼくのロボット

天使達の住むまちを歩いていたらぼくのロボットに木が生えた。

木が大きくなると、やがて蜘蛛と鳥が来て巣を作り、天使とロボットは恋をして、一緒に暮らすようになった。

そしていま、白い花咲き乱れる

アカシアの木の根元で

屑鉄は夢見る。

ロボットだったころの幼かった木と、優しい天使の住んでいた町を。

雲間の村ウーダ・ワラット

ウーダ・ワラットに古代遺跡が見つかったと噂が立ったので、さっそく行ってみることにしたんだ。飛び猫サンテスタンを頭の上に乗せると、ぼくはゆっくりと雲間の村へ飛んでいった。

ウーダ・ワラットにすむ水蒸気人間達によると、かなり昔から遺跡はあったらしい。古代遺跡は小さなクレーターの中であって、どうやらそれは星々の集会場のようだった。

ぼくがそこで火を焚くと、付近の星達がいっせいに集まってきた。

そして派手にロックン・ロール・パーティーが始まった！

行方不明の魔法使い

分解寸前の宇宙船から降りてきたのは、一万年ものあいだ行方不明になっていた魔法使いだった。

そいつはぼくの顔を見るなり青ざめ、急用を思い出したようにそそくさと船に引っ込んでしまい、その後は二度と船から降りてはこなかった。

だからぼくは、今頃こうして彼のものなのか船のものなのかよくわからない赤茶けた残骸を拾い集めなければならないのだ。不愉快極まりない。

クロード氏のムッシュー・オペラ

最近話題になっているオペラがあるというので、劇場に来てみたんだ。

かろうじて開演には間に合ったらしい。まだステージを分厚い真っ赤な垂れ幕が遮ったままだ。満席の客席からは時折咳払いや鼻をすする音が聞こえる。

ぼくは席についたまま幕が上がるのを待ちつづけた。

かれこれ4時間ほど待っていてもオペラは始まらない。

ぼくは待ちくたびれて眠くなってしまった。

うとうとしていると、突然隣の席の老紳士が立ち上がり、BRAVO!と叫んだ。

それに続いて劇場内の観客達から一斉に嵐のような拍手が起こった。

ぼくは驚いてステージの方を見たけれど、分厚い真っ赤な幕は依然として下りたままだった。

つららを折った話

昨日ぼくは美術室で、つららの長さを測ったんだ。

うっかりして、一番長かったのを落として折ってしまった。

そいつはキャーッという悲鳴を残してバラバラになり、真っ赤に染まって息絶えてしまった。

それを見ていた他のつらら達も恐怖のあまり冷や汗をかいて、みんな溶けてしまったんだ。

黒曜石探検隊

ぼくは探検隊の一員として、黒くなめらかに輝く砂丘を長爪ラクダに乗ってすすんでいた。黒曜石の中はとても滑りやすい。ラクダの爪がきゅっきゅっ、と音をたてて砂に食い込む。太陽は黒く輝き、とても暑かった。

しばらくの間立ち止まって周囲の景色に見とれていたら、ラクダがついに耐え切れなくなり、ぶるぶるっと脚を震わせ砂丘を滑り落ち始めた。そしてぼくたちは黒曜石の中からそのまま滑り出てしまった。

その小さな石をポケットにしまうと、ラクダの手綱を引いて、とぼとぼ帰路についたんだ。

土星の輪レース

ぼくが乗るホーキ星はとても気まぐれな奴で、この日もレース中に近くを飛んでいた小娘のホーキ星達にちょっかいを出そうとしたんだ。

行儀が悪いので鞭でしばいたら、奴ひどく腹を立てて土星の輪の中をメチャクチャに飛び回り始めた。

ぼくは振り落とされないように必死でしがみつきながら、奴のわき腹を蹴り続け、鞭をところかまわずあてた。奴も負けじとぼくの頭を土星の岩や氷の塊にぶつけて、振り落とそうとする。ふたりして取っ組み合いになり、もはやレースどころじゃない。

ぼくらは今回のレースで、またしても最下位だった！

モエビー爺さん

いつも酔っ払って赤い顔をしているモエビーの爺さんが、並木道の向こうから千鳥足でやってきた。ようやく仕事をする気になったらしい。

爺さんは時折立ち止まっては近くの木の幹に手を触れる。
すると、それまで緑色だった葉が次々と紅色に染まっていった。

こうして並木道の緑の葉を適当な数だけ紅色に染め変えると、木の根元に立ち小便をして、またふらふらと来た道を引き返していった。

毛糸玉市長

イト市長の次に演説をする予定だったので、ぼくは被り猫布林メリーデを頭に乘せた正装で市長の隣に座っていたんだ。

増税について演説中の市長の袖口からほつれた長い毛糸のようなものが出ていた。それを見つけた布林メリーデが興奮してぼくの頭から飛びおり、糸にとびかかった。

不幸なことに、その糸は市長の衣服から出ていたものではなく、市長の体の一部だったんだ。

イト市長の体は一瞬のうちにほどけ、ぐちゃぐちゃにからまった毛糸の上に二つの目玉が落ちて驚いたようにまわりをキョロキョロと伺っていた。

卵の祝日

ぴよぴよという鳴き声とともに、まぶたをしきりに突っつかれて目が覚めたんだ。
枕から頭を起こしたら、目の前にヒヨコがいた。

ベッドの上は黄色いヒヨコだらけ。気がつけば床の上もヒヨコまみれ。ぼくが身動きすると小さな黄色いカタマリがベッドからぼろぼろこぼれ落ちる。ぼくの部屋はヒヨコの大群に占領されてしまった!

今年も「卵の祝日」がやってきた。今日一日は卵への感謝を込めて、すべての卵料理は禁止。オムレツもハムエッグもゆで卵も作っちゃダメなんだ。

階下はさらにすごいことになっていた。

我が家の飼い猫達、かぶり猫のプリンメリーデと飛び猫サンテスタンはヒヨコの群れを追い回し、半狂乱になってる。

その一方で家政婦のユーレンは朝ごはんの支度も忘れ、愛しそうにヒヨコに頬ずりしてぼーっとなってる。

ヒヨコ達はぼくが足で退けても群がって寄ってくるんだ。

外の道路もすべてヒヨコの大群で黄色く埋め尽くされていた。その鳴き声のうるさいこと!

ぼくは耳栓をして公園へ行ってみた。

街を歩いているご婦人はヒヨコを縫い付けたショールを肩にかけ、胸の平らな若い女性は胸元にヒヨコを隠し、颯爽と歩いている。

公園では子供達がヒヨコでキャッチボールをしている。

公園そばの花屋では店の主がヒヨコでショー・ウィンドウをごしごし拭いている。

公園のベンチでは頭の禿げ上がった紳士が、意味もなくヒヨコの毛をむしっている。

急に激しい風が吹いてヒヨコの群れは一ヶ所にかき集められた。そして巨大な黄色いカタマリへと変貌し、強風が吹くたび街の中をあちらこちらへと転がり回った。ぴよぴよという鳴き声と同時にゴロゴロという大きな音をたてて。それは一日中続いたんだ。

次の日、街はとてもきれいにヒヨコ達によって掃き清められていた。すがすがしい街の眺めに誰もが大満足だった。

ただ、建物の隙間や吹きだまりになっている場所には、既に真っ黒く汚れてみじめな姿の小さな生き物が、弱々しい声でいつまでもびよびよと泣いているんだ。